

試みを与える善なる神

—オリゲネスの「主の祈り」理解に関する考察をとおして—

梶 原 直 美

The study on the righteous God who leads us into temptation: through the Origen's Understanding“Lord's Prayer”

Naomi Kajihara

抄 録

現実を直視し、そのリアリティのなかで祈り、67、8年にわたる生涯¹を送った一人の古代教父オリゲネスは、『祈りについて』という作品を残し、そのなかで主の祈りの注解をなしている。本稿では、そのテキストをもとに、「わたしたちを試みに陥らせず、悪しき者からお救いください」という主の祈りの一部に関するオリゲネスの理解を、とくに「試み」という事柄に着目しながら考察する。

キーワード：試み、善なる神、配慮、祈り、オリゲネス

(2001年9月12日 受理)

Abstract

We have the treatise *On Prayer* by Origen, who is one of church fathers, lived for about sixty-seven or sixty-eight years and prayed with the realities of life. He shows us his interpretation of “Lord's prayer”, and his understanding “temptation”. In this paper we study the meaning “lead us not into temptation, but deliver us from evil” based on his treatise *On Prayer*.

Key words: temptation, the righteous God, ministration, prayer, Origen

(Received September 12, 2001)

序

オリゲネスは、『祈りについて』² という、宗教的現実に対する彼の実践的態度が明確に著されている³ と評される著作を残している。彼はそのなかで、祈りに関する一般的な事柄を論じたのち、主の祈りの注解を行っている。そこにおいて主の祈りは意味ごとに細分化され、その各々の部分は詳細に説明がなされている。そして、主の祈りの一部である「わたしたちを試みに陥らせず、わたしたちを悪しき者からお救いください」という祈りの注解も、ここになされている。⁴

「試み」あるいは「試練」とは、しばしば苦難を意味する。そのような試練は、人間が自己の努力をとおして潜在的な可能性を顕在化することによって克服し、さらなる次元に到達するためのものであるとして理解されることもある。では、克服し得ない試練はないのか。挫折や行き詰まり、そこに意味さえ見出せないような試練も、確かに存在するのではないのか。

われわれはこのような問いを、「わたしたちを試みに陥らせず、わたしたちを悪しき者からお救いください」という主の祈りの一部に関するオリゲネスの理解において考察したい。

オリゲネスは、キリスト教に対する迫害の時代にキリスト者として生きた。キリスト教が未だ教義を確立せず、聖書に関する様々な考え方やその信奉者たちが存在するこの時代のなかで、オリゲネスは聖書注解書をはじめとする数多くの著作を著した。⁵ そこには護教的な意図が含まれている。と同時に、これらの著作には高い学問的評価が向けられている。教師であり、「教会の人」⁶ としての彼の人格もまた注目に値し、倫理的にも厳しく生きた彼の姿がよく知られている。一方で、熱心な教会の人でありながらも逆に教会指導者から追放される経験を持ち、ほかにも人間が日々向き合うであろうさまざまな困難や迷いや苦悩を経験しながら、実際に迫害という時代のなかに迫害される側の人間として生きた。また著作内容を根拠に、かつてカトリック教会から異端視された経緯をも持つ。しかし彼の歩みは常に、聖書の言葉による導きのもとにあり、そこには神学的な深い考察があり、社会における他者との交わりがあった。

このような彼のなかに、試みや苦難に関する、単に楽観的な理解や理想主義を危惧する必要は、殆どないであろう。ゆえにわれわれは、彼の神学から示唆を得たい。オリゲネスは「試み」を聖書からどのように理解したのか。そしてその理解は、彼の生き方にどのように影響することとなったのか。以上の点に着目し、本論文は、オリゲネスの「試み」理解について考察することを目的とする。

1

まず、前述の、「わたしたちを試みに陥らせず、わたしたちを悪しき者からお救いください」という祈りの注解を行っている箇所⁷ 全体の内容を概観することから始めたい。

試み

オリゲネスは『祈りについて』29, 1において、地上での人間の全生涯は試みに満ちている⁸にも拘らず、なぜ「試みに陥らせず」⁹と祈るよう教えられているのか、という問いを立てる。ここでは、生涯が試みに満ちているということを前提として据えるために、霊に反して戦い、神に敵対する思いを持ち、神の律法に従うことの決してできない肉をまどっている、という人間の性質が、その前提の根拠ないしは原因として挙げられる。¹⁰

続く『祈りについて』29, 2-10においては、われわれ人間が試みから解放されていないということが、ヨブ記、詩編17編、パウロの具体的例によって確認される。¹¹ 続いて、それにも拘らず試みに陥らないようにとの禱りが教えられているのはなぜなのか、という問いのもとに、ユディト、ダビデ、およびパウロの例が、優れた人の禱りとして引用される。¹² さらに、使徒パウロでさえもその禱りが「聞き入れられなかった」¹³ ことが示されることによって、使徒よりも劣る人が聞き入れられることを期待して禱り得るのかと、問題点が強調されていく。

この後、オリゲネスは、試みを乞う詩編の言葉「主よ、わたしをためし、わたしを試み、わたしの心と思いを練りきよめてください。」¹⁴ を引用し、これが先の「試みに陥らせないで」という主の祈りと矛盾する危険性を孕んでいることを指摘するとともに、その危険性が「救い主の命ずる意図が何か綿密に検討しない人」の有するものであることを示唆する。つまり、その言葉を理解するためには綿密に検討することが不可欠なのである。その後の論述は、『祈りについて』29, 9に到るまで、地上の生が試みに満ち、すべての時が試みの時であるということの具体的な説明となっている。

その例の最初で、貧者と富者が対照的に示される。欠乏している人は「盗み神の名を汚さないよう」¹⁵ 用心すべきであり、そのような人は物質的富への管理が不十分なことによって富める者¹⁶ と共に懲罰の地を受けたのであり、あるいは貧困を卑しい態度で忍び、下品な態度で暮らしたため、天での希望¹⁷ を失墜したのである。また逆に、富んでいる人は、「虚偽に満ちたものとなり、高ぶって『誰がわたしを見ているか』と言う」¹⁸ 危険性を有していること、パウロさえも高ぶらないためにサタン¹⁹ の刺が必要だった¹⁹ こと、逆に王ヒゼキヤは高ぶって墮落した²⁰ ことが言及される。その中間に位置する人々もこのような危険性から逃れられない。オリゲネスがここで、「罪を犯すことから免れていると言うのではありません」²¹ と述べていることから、富者も貧者も、富および貧しさのゆえに「罪を犯す」ということが、ここでのオリゲネスの基本的な理解であると言える。

貧者と富者の対比に続いて次に示されるのは、健康な人と病気の人という対照的な例である。健康な人がその健康と澁刺さとのために試みから免れ得るわけではなく、また他方で病気の方は、時間が十分にあり「汚らわしい行為に関する思案を簡単に是認しがち」である。それゆえ、結局両者とも「神の神殿を壊し」²² やすい。すべての人が「あらゆる面に見張りを立て、心を守らないなら」²³ 多くのことにかき乱される。また、「苦勞に打ちめされ、雄々しく病気を耐え忍ぶことのできない多くの人は」、体以上に魂を病んでいるのだと指摘されている。ここでおそらくオリゲネスは「魂を病む」という事柄に関心を

向けたため、その次にはそれと同様、魂の不健全さから生じる状態に言及しているものと思われる。つまり、キリストの名を担うことを恥じ、侮辱を避けることによって、「多くの人が永遠の恥辱に陥った」ことが述べられているのである。

続いて言及されるのが、高慢の罪を犯す危険性についてである。人から尊ばれているなら、つまり「多くの人々の間での誉れが善であるかのように高ぶる人々」は、すでに人から報いを受けた²⁴ものとして、神からの報いは望めない。

そして、『祈りについて』29, 9において、オリゲネスは地上の生が試みに満ちており²⁵、すべての時が試みの時であると明言し、以下のように祈ることを勧めている。

「ですから『試み』から救われるように祈りましょう。[しかし、それは] 試みられないようにではなく、一わけても「地上に」ある者らにとってそれは不可能なことですから一、試みを受け負かされることのないように、とです。」²⁶

以上のような項目に言及しながら、オリゲネスは「試みに陥る」ということの意味を示そうとするのであるが、このすべてに共通するものは「罪」ということである。すなわち、「試みに陥る」ということと「罪を犯す」ということが、殆ど同じ内容を指すものとして理解されていると考えることができる。つまり、オリゲネスにとって「試みに陥る」ということは、「罪を犯す」ということを意味するのである。そうすると、前述の「『試み』から救われるように」というのは、「罪から救われるように」ということを指すと考えられる。では、「罪を犯す」「罪から救われる」とはどういうことなのか。有賀鐵太郎は、オリゲネスが救いを「人間性、むしろ人間に与えられた神の像²⁷の完成と見」ているものと理解している。²⁸

以上をもって、オリゲネスは全ての人々が試みと無関係ではなく、むしろ意外な機会にさえ、あるいは油断をするなかに、試みが存在することを示し、その試みに対処するために各自の姿勢を整えることを促していると言えよう。

オリゲネスはしばしばこのように、聖書から具体的な例を引用し、説明することによって、彼の論理の根拠に正当性を示すとともに、聖書の適切な解釈方法を示すのであるが、これに続く『祈りについて』29, 10では、聖書の研究者でさえ聖書を適切に理解し得るとはかぎらないことを述べている。聖書の事例に基づいて「試み」について詳述したオリゲネスが、ここで聖書解釈の難しさを述べることによって、日常に見聞きすることのなかにも不確かなものが潜んでいることを示唆する。オリゲネスは不正確な聖書解釈の原因を、解釈者が聖書研究のさいに生じる「試み」について「認識していないためである」とみなしている。つまり、「試み」の可能性を常に認識する必要があるということである。ここには、適切に聖書解釈をすることの重要性が述べられている。この背景には、マルキオン派やヴァレンティノス派らによる聖書解釈の存在、および、その解釈によって動揺させられている人々の存在がある。

オリゲネスは、以下のようにまとめている。

「わたしたちは、試みを受けることがないように祈るべきではなく—それは不可能です—、それによって捕えられ、負かされてしまう人々に起こるように、試みによって取り囲まれることのないように祈らねばなりません。」²⁹

この言葉は、われわれが試みを逃れられないという点、そしてまた試みから救われる、試みに負けない、或は試みに取り囲まれないように祈ることが必要であるという、この二点において、前述の『祈りについて』29, 9からの引用と殆ど共通した内容となっている。つまり、ここには、オリゲネスの確信と強調点とが存在すると考えられる。

試みを与える神

続いてオリゲネスは次の論点へと移っていく。それは、試みを与える神について、いかに認識すべきか、つまり神がなぜ試みを与えるのか、ということについてである。

人は全て例外なく、神から試みを受ける。その結果、勝ち、あるいは負ける。試みに陥ることが悪いことであるなら、神はなぜ人が試みに負けることを黙認されるのか。マルキオン主義者たち³⁰は、新約聖書に示された救いの神を善なる存在とするが、厳しく裁く律法の神は別であるとみなしていた。オリゲネスもまた神に関して「善」という性質をしばしば好んで用いている。³¹ しかしそれは、マルキオン主義者たちのようにどちらか一方の神というのではなく、旧約聖書および新約聖書に示されている同一の神に対して「善」と理解しているのであり、その点に関して、マルキオン主義者の理解を誤謬として指摘している。オリゲネスが彼らを批判した点については、例えば『諸原理について』における次のような叙述から伺い知ることができる。

「さて、善とは、恵みを与えられるに値しない人、恵みを得るにふさわしくない人をも含めて、全ての人に恵みを必然的に与える性向であると、異端者どもは考えている。しかし私の見るところでは、彼らはこの定義を正しく用いていない。つまり、誰かに苦しみや悲しみを与えることが、人を恵むことにならないと彼らは考えている。…」³²

こののち、オリゲネスは、「善」なる神が「試みに負けるように」人を試みに連れ込むのではないと述べる。そして、パウロの言葉を引用し、それについて詳述する。

「…ゆえに、神は、彼らが心の情欲にかられ、自分のからだを互いにはずかして、汚すままに任せられた。…それゆえ、神は彼らを恥すべき情欲に任せられた。…そして、彼らは神を認めることを正しいとしなかったので、神は彼らを正しからぬ思いにわたし、なすべからざる事をなすに任せられた。」³³

これらの箇所は、聖書に書かれてあることで、なぜ神がそのような人を放置しておかれ

るのが理解しがたい内容であるという理由から、引用された。『祈りについて』29, 12 および29, 13の叙述には、その背景にマルキオン主義者の主張が明らかに意識されており、とくに護教的な要素が強いと言えよう。また、オリゲネスの「以上の点がこの人々をひどく困惑させる」という言葉にも、聖書解釈の難しさが言及されている。これについては後述する。³⁴

オリゲネスは、聖書を理解するさい、そこに、文字通りの意味ではなく、「潜んでいる『意味』を探求している」³⁵。ではこの場合、いかなる解釈が望ましく、どのような意味を見出すことが可能なのか。人間が試みに負けるのは神、即ち「善なる父」のせいなのか。

『祈りについて』29, 13においては、以上の矛盾点を理解するためのさらなる考察が展開されている。オリゲネスは以下のように考える。すなわち、神は、言理に与っている魂それぞれの永遠の命をめざして、魂それぞれを「配慮」している。³⁶ 魂は決断の自由を有し³⁷、その状態の原因は各々自分のうちにある。それ以外の何かが原因なのではない。神はある程度まで悪が増大するまま放置され、その状態が悪化して自分で立ち直ることが不可能となるまで、つまりそこに人間が自分の無力さを感じるまで、放置される。そしてそれは、人間が自分の過失に気づき、悪を憎み、神の力によって癒されたときに一層魂の健康を享受するためであると説明されている。必要なのは悪に関する知識ではなく、存在する自らの実存において、自らの悪を味わい、自らの無力さを経験し、自らの魂の在り方を探ることなのである。そこにこそ、真の意味の決断の「自由」を語る場が与えられる。換言すると、いかなる条件にも制限されない、自己自身として決断する可能性の獲得である。そこにはまた、時間に制限されない「永遠」さえも存在する。このようにして、神の配慮はわれわれを永遠の命へと導こうとされる。オリゲネスは、この神の最終的な目的が達成されることにおいて、神の善性が示されると考えているのである。³⁸

さて、彼はまた、異邦人とイスラエル人が「欲心を起し」、与えられているマナ以外に、以前味わった肉や魚、野菜などを求めて泣いた出来事を、聖書から例として引用する。³⁹ モーセはその現状を見て、彼らを統率するのは自分にとってもはや過剰な重荷であると判断し、そのことを批判的に神に訴える。神はそれにこたえて、重荷を分かち合う長老をモーセに与えると約束するとともに、肉を「鼻から出るようになる」ほど過剰に与え、やがて民が肉に飽き果てるであろうことを予告する。聖書には、民にうずらの肉が与えられ、しかし「その肉がなお彼らの歯の間にあって食べつくさないうちに、主は民に向かって怒りを発し、主は非常に激しい疫病をもって民を撃たれた」ことが記されている。オリゲネスは過剰に与えたという神の行為に注目し、その過剰が「欲を残すような方法で与えることを望まれ」なかったゆえのものであったと説明する。つまり、欲を満たすためでなく、欲に駆られることをなくすために、神は過剰に与えたということである。しかし、人間には、一度飽きたとしても、また再び同じ欲に駆られる可能性が潜んでいるのではないであろうか。オリゲネスもまたそれを指摘しながら、しかし「このようなことが生じたとしても、欲したことを憎むようになり、より悪いものらを渴望したときに軽んじた天の糧と美への道を再び辿ることができるようになるため」⁴⁰ であると明言している。

このほかにも、神からの試みとして幾つかの例が挙げられる。不朽の神を偶像に格下げし、「迷い」におかれた人々⁴¹、また、「頑なさ」が与えられたあるエジプト王⁴²などの例である。神はある理由⁴³のもとに人間を「わな」に引き入れる⁴⁴が、それも父のゆるしなしには起こらない。その神は、強制的な善を望まず、自発的であることを望まれる。

試みの効用について

これらの説明ののち、オリゲネスは試みの「効用」⁴⁵について述べる。彼によると、神はわれわれの魂が享受しているものを当然知っておられるが、われわれ自身はなかなか知り得ない。しかしそれは、試みを受けることで明らかにされる。ゆえに、試みによって自分の悪を自覚し、その結果、見えなかった諸々の善が自覚され、その善は善であるがゆえに貴く、感謝に値するものなのである。つまり、試みは、われわれ人間が一体いかなるものなのかを示し、心に隠されているものを知覚させる効用を有している。そのような理解とともに、オリゲネスは例として、幾つかの箇所を聖書から引用している。⁴⁶

まず、エバおよびカインに関する出来事を取りあげ、彼らの持つ否定的側面に言及する。つまり、彼らの弱さや邪悪は誘惑によって生じたのではなく、もともと彼らのうちにあったのである。次にオリゲネスは、ノアおよびエサウを取りあげて、彼らの肯定的側面に言及する。彼によると、その出来事は、隠されているもの、とくにヨセフの場合には「克己の輝かしさ」が明らかにされるためなのである。

オリゲネスはここで、自らを含め、また読者を含め、人間の置かれている状況に視野を移す。われわれは「試みの中間期に」⁴⁷あるのであり、試みに対して準備していなければならない。自己自身の力でなせることをするなら、人間的な弱さのゆえに欠けたところは、常に神が補い、満たしてくださるのである。そして、以下のように述べている。

「神は『ご自分を愛する人々』、彼らが[自らの決定によって]いかなるものとなるであろうか、ご自分の誤ることのない予知に基づいて、予見しておられる人々と『共に、善となるようすべてのことを働かれる』⁴⁸のです。』⁴⁹

悪しき者から

さて、次に「わたしたちを悪しき者⁵⁰からお救いください。」という言葉について、オリゲネスは、マタイによる福音書とルカによる福音書とを比較して考察している。それは、マタイによる福音書には含まれているが、ルカによる福音書には含まれていない。彼によれば、ルカによる福音書は、この言葉を、「わたしたちを試みに陥らせないでください」という言葉をもってすでに表しているのだと考え⁵¹、この箇所に関してそれほど多くは叙述していない。その短い内容を辿ってみることにする。

オリゲネスは、神が悪しき者から救ってくださる「時」についてまず語る。それは、ふりかかったことに雄雄しく立ち向かい、打ち勝つときなのである。また、同様の意味を持つ聖句として、もう一箇所、「義しい者の艱難は多い。しかしそれらのすべてから彼らを

救われる。』⁵² を引用し、この言葉に当てはまる代表的人物としてパウロを挙げている。⁵³ ここで言われている「艱難にさらされる」とは、オリゲネスによれば、意に反してふりかかる危険な状態に置かれていることを意味する。⁵⁴ そしてそのようなときも「行き詰まる」ことがないなら、神は人間を艱難から救われるのである。ここで言われている「行き詰まる」とは、艱難に負け、それに身を委ねる決意を伴うことであると理解されている。⁵⁵ つまり、艱難にさらされたときにも、自らの決意をどこに据えるか、危険な状態に身を委ねるのか、あるいは神に助けを求めるのか、人間にはその選択が残されているのである。

オリゲネスはこのように「艱難から」救われることに関する考察のちに「悪しき者から」救われる、ということへの考察を展開する。オリゲネスはヨブの例を引用し、彼が救われたのは、困難な状況のなかで、彼が「罪を犯さなかつただけでなく、義しい者であることを明らかにしたため」⁵⁶ であると説明している。

その後、これらすべてに関する短い結びの部分を迎える。オリゲネスは読者に呼びかける。確固たる認識をもって、試みに陥ることのないように、また、そのためには神の言葉を聞き、神に助けを求めるように。われわれは、意に反する艱難のなかで、身を委ねる決意をする以外に、神の言葉を聞き、神に助けを求めることもまた選択し得るのである。オリゲネスは、それに関する「確固たる認識」のもとに、後者の態度を選ぼう奨励する。そして、最後に以下のように語っている。

「信仰の盾で、悪しき者によって彼らに投げられた火矢を悉く消す人々⁵⁷ は、火を焚きつけられることはありません。[そのような人々は] 悪しき者の [火] が力をふるうことを許さず、かえって霊的なものであるよう鍛えた者の魂に真理の観照によって刻み込まれた、神によって鼓舞され、救いをもたらす思考の洪水によって、いともやすやすとそれを無効にしてしまう「永遠の生命へと湧きあがる水」⁵⁸ の川を、自らのうちに有しているからです。』⁵⁹

以上において、われわれは、「わたしたちを試みに陥らせず、わたしたちを悪しき者からお救いください」という、主の祈りの一部に関するオリゲネスの叙述内容を概観し、幾つかの着目すべき点を見出した。全ての人が試みと無関係ではないこと、試みのなかにあってもそれに完全に身を委ねるのでなく神の言葉を聞き神に助けを求める決意を持ち得ること、試みを受けることによって明らかにされた自らの悪が善への気付きへと自らを導き得ること。そして、それらすべては「善なる神」のもとに引き起こされている、ということである。ここで、「善」という事柄が試みによって導かれるひとつの目的でありかつ根拠であり、さらには試みを与える神の特徴的な性質である、ということが認識される。そこでわれわれはこの点に絞って、さらに考察を深めたい。

2.

まず、善ということに関するオリゲネスの理解を探ってみたい。オリゲネスは「善」を

どのようなものとして理解しているのでしょうか。⁶⁰

オリゲネスは、『諸原理について』のなかの多くの箇所善に関して言及している。本稿と関連性があると思われる箇所を若干、以下に引用する。

「これは、善なる神であり、万物の慈悲深い父であり、同時にまた *εὐεργετική δύναμις* と *δημιουργική* 即ち善をなす力、また創造し、配慮する力である。…それ故、この「善をなす力」が、善をなさなかつた瞬間があったとは考えられない。」⁶¹

また、善なる神を否定する者らへの反論も挙げておく。

「更に、義とは各々にその功罪に応じて報いる性向であると、彼らは考えている。しかし、ここでも彼らは自分たちの定義の意味を正しく解釈していない。というのは、彼らは、悪人には悪を、善人には善を報いることが義であると考えているからである。即ち、彼らの見解に従えば、義なる者とは悪人に対して好意を抱かず、悪人に対しては憎悪を抱くのである。」⁶²

ここから、オリゲネスにおいて、神の義は悪人に悪をもって報いるものではなく、悪人に憎悪も抱かず、むしろ好意さえ抱く性質であることが読み取れよう。これは、オリゲネスの、マルキオン主義批判においてさえ伺うことができる。

有賀鐵太郎は、オリゲネスが正義をいかにとらえていたのかについて論じるなかで、応報的賞罰がその目的ではなく、それが神自身の善性によって制約されるものであると理解されていたことを明らかにしている。⁶³ つまり、正義は、善性を前提として存在するものだということである。

われわれはすでに、「以上の点がこの人々をひどく困惑させるであろうことをよく知っています。」⁶⁴ というオリゲネスの論述を見た。この人々とはマルキオン主義者であり、オリゲネスは彼らの誤謬と向き合い、対決しなければならなかった。彼らはキリスト者たちを惑わせ、混乱の原因となっていた。それは、オリゲネスの別の著作において、彼らに対する嫌悪感という表現のなかで理解することも可能である。⁶⁵ しかし、人間は本来間違いを犯す存在でもある。「この人々をひどく困惑させるであろうことをよく知っています」という言葉には、オリゲネスのマルキオン主義への批判とは別に、彼ら自身への配慮さえ垣間見ることができないであろうか。われわれは、「善」としての人間の在り方を、オリゲネスの言動そのもののなかに見出せるのである。

別の面からも考えてみたい。先に、本稿において「神の配慮はわれわれを永遠の命へと導こうとされる。この神の最終的な目的が達成されることにおいて、神の善性が示される」

と述べた。神は善であるがゆえに、人間が永遠の命を得るに到ることを望まれる。つまり、永遠の命を得ていない、ということがこの世における人間の在り方の前提となっている。そこで、善なる神は、人間を永遠の命へ導こうと「配慮」されるのである。「配慮」とは、愛に基づいて為されるものである。松丸は神について、配慮、つまりオイコノミアという観点から、「神に背き、罪を犯して死んだ者に悲嘆の涙を流し、かれをいまでも生きているかのように探し求める神」と表現している。⁶⁶ 愛ある者の姿がそこに示されている。祈るさい、神がこのように善であることを知っているなら、より一層神への信頼は強まり、与えられるすべての事柄を享受する手がかりとなろう。オリゲネスは、人間がとくに試みのなかで祈るとき、神が愛をもって配慮される「善」なる方であることを思い出すことの大切さ、ないしは必然性を強調していると考え得る。⁶⁷

結

以上、オリゲネスのテキストをもとに、善という点に焦点をあて、試みにおける祈りの意味について考察を行ってきた。ここで、これまでに理解し得たことについて整理しつつ、最終的な考察によって結びとしたい。

われわれ人間は、現実の様々な状況のなかでそれぞれに歩む。そこには、「悪い」と形容され得るような状況が数多く存在する。そのさい、われわれは、自分なりの基準で、何が善であり何が悪であるのかを定めている。ただし、善と悪とを区別するそれぞれの基準は全く同じではない。しかし、われわれの基準と神の基準との差異はさらに大きい。なぜなら、神と人間との間には「質的差異」⁶⁸ が存在するからである。

しかし、ひとりの人間である「わたし」という個人の主体に、善なる神の主体を伴わせるとき、つまり、本来的に善を願い、善を与え、善へと導く存在者を自らの内部に存在させ、自らの判断、思考、また意志にその影響を受け入れるなら、主体は変化し、当然そこから生じるすべてのものも変容する。オリゲネスは、祈るよう命じる。善なる神に対してであるから、信頼し過ぎることはない。人間は、確かに、行き詰まること、試みに陥ってもはや動けないようなことを経験する。しかしオリゲネスは、人間とはそういうものであると前提している。それにも拘らず、祈るように勧める。むしろだからこそ、祈ることが必要なのである。神は人間への処罰さえ、善の範囲において与えたまう。善とは、「わたし」を存在させた根拠であり、それなしに、「わたし」もまた存在しない。⁶⁹

われわれ人間は、自己存在が常に善に支えられていることを認識するなら、自らを偽ることなく、ありのままの人間として、祈りにおいて神と人格的に交わる。しかしそれは、われわれ自身がまず認識することから始まるのではなく、先に、完全に善なる神の祈りがあるのである。オリゲネスは、迫害というひとつの試みの時代のなかで、われわれよりも先に生きた。彼自身の祈りは、様々な試みの中にあるわれわれを、祈りへと導いてくれるのではないだろうか。またそれ自体が、オリゲネスの祈りであったように思われる。

注

本論文において、オリゲネスの著作については以下の略記を用い、聖書の引用表記は MLA による略記に従った。

『祈りについて』：PE

『諸原理について』：PA

『ヨハネによる福音注解』：ComJn

また、聖書の邦訳には、日本聖書協会口語訳を用いた。

- 1 M. Harl による従来の定説に基づく。Cf., Harl, M., *Origène et la fonction révélatrice du Verbe Incarné*, Paris 1958, pp. 70–71.
- 2 底本として、Koetschau, P, hrsg., “ΠΕΡΙ ΕΥΞΗΣ”, in: *Die griechischen christlichen Schriftsteller (GCS) Tomus III (Origenes Werke Tomus II)*, Leipzig 1899, pp. 297–403. を用いた。邦訳には、小高毅訳『オリゲネス 祈りについて・殉教の勧め』（キリスト教古典叢書12）、創文社 1985年、45–157頁、を参照した。なお、本文中に引用する邦訳は、小高訳に従った。
- 3 有賀鐵太郎『オリゲネス研究』（有賀鐵太郎著作集Ⅰ）、創文社 1981年、19頁、参照。
- 4 PE 29, 1–30, 3 (GCS 3, 381, 23–3, 395, 12).
- 5 彼の著作については、Crouzel, H., tr. by Worrall, A.S., *ORIGEN*, Edinburgh 1989, pp. 37–49. に記されている。
- 6 Cf., Trigg, J.W., “Origen Man of Church”, *ORIGENIANA QUINTA*, Leuven 1989, pp. 51–56.
- 7 PE 29, 1–30, 3 (GCS 3, 381, 32–395, 12). なお、この原文は、マタイによる福音書の原文と全く同じである。
- 8 Job 7, 1 (LXX).
- 9 PE 29, 1; “Καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν...” (GCS 3, 381, 23). Cf., Matt. 6, 13; Luke 11, 4.
- 10 PE 29, 1; “ἢ γὰρ ἐσμεν ἐπὶ γῆς περικείμενοι τὴν στρατευομένην σάρκα κατὰ τοῦ πνεύματος, ἧς τὸ φρόνημα ἔχθρα ἐστὶν εἰς θεόν, μηδαμῶς δυναμένης ὑποτάσσεσθαι τῷ νόμῳ τοῦ θεοῦ, ἐν πειρασμῷ ἐσμεν.” (GCS 3, 382, 1–4) : 「『靈に反し』 (Gal. 5, 17) て戦い、その思いは『神に敵対しており、神の律法に従うこと』の決してできない (Rom. 8, 7) 肉をまとっているわたしたちは、試みのうちにあるのです。」
- 11 Job 7, 1 (LXX); Ps. 17, 30 (LXX); I Cor. 10, 13.
- 12 Acts 14, 22.
- 13 II Cor. 11, 23–25; I Cor 4, 11–13.
- 14 Ps. 26, 2.
- 15 Prov. 30, 9.
- 16 Cf., Luke 16, 19–31.
- 17 Col. 1, 9.
- 18 Prov. 30, 9.
- 19 II Cor. 12, 7.
- 20 II Chron. 32, 25–26.
- 21 PE 29, 6; “τοῦ κατὰ τὴν σύμμετρον κτήσιν ἀμαρτάνειν πάντως εἰσὶν ἀπηλλαγμένοι.” (GCS 3, 384, 18–19)
- 22 I Col 3, 17.
- 23 Prov. 4, 23.
- 24 Cf., Matt. 6, 2.
- 25 Cf., Job 7, 1.
- 26 PE 29, 9 ; “διόπερ εὐχόμεθα ῥυθῆναι πειρατηρίου, οὐκ ἐν τῷ μὴ πειράζεσθαι (τοῦτο γὰρ ἀμήχανον, μάλιστα τοῖς ἐπὶ γῆς) ἀλλὰ ἐν τῷ μὴ ἠττάσθαι πειραζομένους.” (GCS 3, 385, 16–18)
- 27 ゲッセルは、オリゲネスの考える神の像が、救いのわざにおいて、創造の原因 (causa efficiens)、肖像の原因 (causa exemplaris)、目的の原因 (causa finalis) という役割として理解されている

と指摘している。つまり、人間は本来的に神に似せて創造されて存在し、神を模倣しようとする意志を持ち、神が目的であるべき存在者なのである。その全ての原因は神にあり、人間はその原因をもとに与えられた自己を生き、その全てを神は助ける。Gessel, W., *Die Theologie des Gebetes nach >De Oratione< von Origenes*, München/Paderborn/Wien 1975, pp. 110–111. オリゲネスは、彼の『ヨハネによる福音注解』のなかで、神の意思を完全に有し、行うのは、ただ御子だけであることのゆえに、御子のみが神の像である、と述べている。いかなる聖人であろうとも、完全には神の意思を持ち得ないのである。(Cf. ComJn X III, 36.) とすると、有賀の指摘する「神の像の完成」はあり得るのかとの疑問が生じてくる。完成がありえないとすれば、救いもありえないことなるからである。この点について、ここでは議論しないが、今後、さらに考察する必要がある。なお、オリゲネスはここで、「意思とは心構えである」(“τὸ περὶ τῆς διαθέσεως ἐστὶν τὸ θέλημα, δηλοῖ ἢ ἐπιφερομένη λέξις” と述べている。(Ibid., X III, 36 ; 235, 2–3.)

- 28 有賀鐵太郎、前掲書、248頁、参照。
- 29 PE 29, 11 ; “*χρὴ τοῖνυν εὐχεσθαι οὐχ ἵνα μὴ πειρασθῶμεν (τοῦτο γὰρ ἀδύνατον) ἀλλ’ ἵνα μὴ ὑπὸ τοῦ πειρασμοῦ περιβληθῶμεν, ὅπερ πάσχοουσιν οἱ ἐνεχόμενοι αὐτῷ καὶ νενικημένοι.*” (GCS 3, 386 12–14)
- 30 マルキオン主義者らに関して、オリゲネスはたとえばこのように表現している ; “*νομίζοντας εἶναι τὸν ἀγαθὸν πατέρα τοῦ κυρίου ἡμῶν παρὰ τὸν τοῦ νόμου θεὸν, εἰ ὁ ἀγαθὸς θεὸς τὸν*” (GCS 3, 387, 7–8) : 「わたしたちの主の善なる父は、律法の神とは別であるとみなしている彼ら」(PE 29, 12.)
- 31 オリゲネスは『諸原理について』II, 5のなかで義と善について述べており、神に善と義の性質を帰していることが明らかである。その一部を以下に引用する。なお、『諸原理について』の底本としては、Görgemanns, H.-Karpp, H. hrsg., *Origenes, Vier Bücher von den Prinzipien, Texte zur Forschung*, Darmschadt 1976。(以後、Görgemanns-Karppと略記)を使用した。 ; “*Addemus adhuc etiam haec, versutiis eorum compellentibus nos. Si aliud est iustum quam bonum, quoniam bono malum contrarium est et iusto iniustum, sine dubio et iniustum aliud erit quam malum*” [Görgemanns-Karpp, 350, 24–26] ; 「以上これらすべてのことから、律法の神と福音書の神が同じ一なる、義にして善なる神であること、そしてこの神が、義をもって善を行われ、善をもって罰せられることが証明された。というのも、義なしの善も、善なしの義も、神の本性の品位を表し得ないからである。」(PA II, 5, 3.)
- 32 Cf., PA II, 5, 1 : “*Aestimant igitur bonitatem affectum talem quendam esse, quo bene fieri omnibus debeat, etiamsi indignus sit is, cui beneficium datur, nec nebe consequi mereatur ; sed, ut mihi videtur, non recte tali usi sunt definitione, putantes non fieri bene huic, cui austerum vel triste aliquid inferatur.*” (Görgemanns-Karpp, 340, 21–25)
- 33 Rom1, 24 ; 1, 26–28.
- 34 注64を付した本文を参照。
- 35 Conf., PA II, 5, 2 ; “*A nobis autem talia ista non secundum litteram intelleguntur, sed sicut Hiezechiel docuit ‘Parabolam’ eam dicens, requirimus quid introrsus significet ipsa parabola.*” (Görgemanns-Karpp, 344, 1–3)
- 36 Cf., PE 29, 13 ; “*ἡγοῦμαι δὴ τὸν θεὸν ἐκάστην λογικὴν οἰκονομεῖν ψυχὴν, ἀφορώντα εἰς τὴν αἰδίον αὐτῆς ζωὴν, …*” (GCS 3, 387, 26f.)
- 37 オリゲネスは、理性的魂が自由意志と決断力を有していると述べている。(Cf., PA Pref. 5. また、『祈りについて』、小高による訳注108、参照。) その他、『諸原理について』III, 1では自由意志に関する多くの叙述が見られる。なお、オリゲネスの自由意志理解に関して、有賀鐵太郎、前掲書、227–297頁において、『ケルソス反駁論』が中心に取り上げられ、優れた詳述がなされている。また、Gessel, W., op. cit., pp. 149–171. においては、『祈りと摂理』というテーマのもとにオリゲネスの自由意志理解が論じられている。ほかに、Rist, J. M., “The Greek and Latin Text of the Discussion on Free Will in DE PRINCIPIIS”, vol. III, in : *ORIGENIANA*, pp. 97–111, Universita di Bari 1975 ; Eijk, Ph. J. van der, “Origenes’ Verteidigung des freien Willens”, in : *VIGILIAE CHRISTIANAE*, Bd. 42, Leiden 1982, pp. 339–351. などが挙げられる。

- 38 たとえば有賀が同様の理解をしている。「それ故、神が人間を善に導きたもうためには、時にはこれをその誘惑に撃ち負けるままに放置し、かれが自ら悟るのを待つ必要があるのである。…かくしてこそ始めてわれらの得る善は、真にわれらのものとなるのである。」(有賀鐵太郎、前掲書、79頁。)ただし有賀はここで、神自身の善性でなく、人間が試みを通して導かれる善性について言及している。
- 39 Num. 11, 4.
- 40 PE 29, 14 (GCS 3, 389, 23-25).
- 41 Rom.
- 42 Exod. 7, 3; 7, 22; 8, 19; 9, 12; 9, 35; 10, 1; 10, 27; 11, 10.
- 43 オリゲネスは、与えられている能力、たとえば鳥であれば飛ぶことのできる能力を、持ちながらも有効に用いないことを理由として挙げている。
- 44 PE 29, 16; “εις τὴν παγίδα” (GCS 3, 391, 15). Cf., Ps. 66, 11.
- 45 PE 29, 17; “χρεία” (GCS 3, 391, 14).
- 46 「あなたが義しい者であることを明らかに示す以外のために、わたしがあなたを取り扱うと考えるのか」(Jb 40, 3 LXX); 「それで主はあなたを苦しめ、あなたを飢えさせ、…マナをもって、あなたを養われた。」(Deut. 8, 3); 「…あなたを導いて、あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地を通り、…」(Ibid. 8, 15); 「[それは] あなたの心を苦しめて、あなたを試み、あなたの心のうちを知[るためであった]。」(Ibid. 8, 2)
- 47 PE 29, 19; “ἐν τοῖς μεταξὺ καιροῖς τῆς τῶν πειρασμῶν” (GCS 3, 392, 26.)
- 48 Rom. 8, 28.
- 49 PE 29, 19; “ὁ τοῖς ἀγαπῶσιν αὐτὸν πάντα” συνεργῶν εἰς ἀγαθόν, τοῖς κατὰ τὴν ἀνευδιή πρόγνωσιν αὐτοῦ, ὃ τι ποτὲ ἔσσονται παρ’ αὐτοῦ, προεωραμένοις.” (GCS 3, 393, 24.)
- 50 小高は、オリゲネスがこの言葉を中性形でなく男性形で用いていることを指摘している。『祈りについて』、訳注112、243頁、参照。有賀は、一般に言われる「悪」は真の意味の悪ではなく、むしろ神が魂を癒し訓練するための手段に過ぎないと理解している。有賀鐵太郎、前掲書、249頁、参照。
- 51 この言葉の選択の違いについては、語る対象に根拠を見ている。つまり、詳述が必要な群衆には多くの(マタイによる福音書)、また弟子たちには簡単な言葉をもって(ルカによる福音書)説明する。Cf., PE 30, 1(GCS 3, 393, 5-7).
- 52 Ps. 34, 19.
- 53 PE 30, 1 (GCS 3, 393, 14-15); 「まさにパウロが言っています、『あらゆる面で艱難にさらされている』(II Cor. 4, 8)と。」; εἴ γε καὶ ὁ Παῦλός φησι τό· ἐν παντὶ θλιβόμενοι” ὡς μηδὲ πώποτε οὐ θλιβόμενοι” (GCS 3, 393, 18-21).
- 54 PE 30, 1 (GCS 3, 393, 17-18); cf., II Cor. 4, 8.
- 55 PE 30, 1; “... τοῦ μὲν θλίβεσθαι κατὰ τι πάτριον παρ’ Ἑβραίοις οὕτω σημασινομένου ἐπὶ τοῦ ἀπροαιρέτως συμβαινόντος περιστατικοῦ, τοῦ δὲ στενοχωρεῖσθαι ἐπὶ τοῦ προαιρετικοῦ, ὑπὸ τῆς θλίψεως νενικημένου καὶ ἐνδεδωκότος αὐτῆ.” (GCS 3, 393, 18-21.)
- 56 Job 1, 22.
- 57 Cf., Eph. 6, 16.
- 58 John 4, 14; 7, 38.
- 59 PE 30, 3; “οὐκ ἀνάπτονται δὲ οἱ τῷ θυρεῷ τῆς πίστεως” πάντα σβεννύντες τὰ ἐπιπεμπόμενα αὐτοῖς πεπυρωμένα” ὑπὸ τοῦ πονηροῦ” βέλῃ· ἢ ἐπὶ ἄνθρωποις ἐν ἑαυτοῖς ποταμοὺς ὕδατος ἀλλομένου εἰς ζωὴν αἰώνιον,” τοὺς μὴ ἔδοντας ἰσχύσαι τὸ τοῦ πονηροῦ” ἀλλὰ εὐχερῶς αὐτὸ λύοντας τῷ κατακλυσμῷ τῶν ἐνθέων καὶ σωτηριῶν λογισμῶν, ἐντυπομένων ἀπὸ τῶν τῆς ἀληθείας θεωρημάτων τῆ τοῦ ἀσκούοντος εἶναι πνευματικοῦ ψυχῆ.” (GCS 3, 395, 6-13.)
- 60 P. ネメシエギ「聖書解釈の歴史—オリゲネスの聖書解釈法」『日本の神学』5、115-125頁、日本基督教学会 1966年、は簡潔にして非常に意義深い。ここには、オリゲネスの「善」理解とその根拠、またオリゲネスの聖書解釈法がそこに「神の善」を理解することなしには適切に成

し得ないことが述べられている。

- 61 Cf., PA I, 4, 3 ; "...., Hic est bonus deus et benignus omnium pater, simul et εὐεργετικὴ δύναμις et δημιουργική, id est bene faciendi virtus et creandi ac providendi...Et ideo nullum prosus momentum sentiri potest, quo non virtus illa benefica bene fecerit."(Görgemanns-Karpp, 188, 2-4 ; 188, 9-10.)
- 62 Cf., PA II, 5, 1 ; "Sed et in hoc rursum definitionis suae sensum non recte interpretantur. Putant enim quia quod iustum est malis mala faciat, bonis bona, id est, ut secundum sensum ipsorum iustus malis non videatur bene velle, sed velut odio quodam ferri adversum eos."(Görgemanns-Karpp, 342, 1-5.)
- 63 また、「神は本来善でいまし、その造りたまいし理性的存在を教育し訓練して、その完全なる善に与らしめることを目的としたもう。しかして正義はその訓練のために必要なのである。」とも述べている。有賀鐵太郎、前掲書、246頁、参照。
- 64 Cf., PE 29, 13 ; "ἐκείνους μὲν οὖν εἶδ' οἶδα ὅτι σφόδρα παράξει ταῦτα,..." (GCS 3, 387, 19)注31を付した本文を参照。
- 65 Cf., PA II, 5, 4 ; 「たくさんの証拠で打ちのめされた異端者らの顔を赤らめさせ、彼らを恥じ入らせることもできるであろう。」; "ut pluitibus testimoniis convicti haeretici aliquando forte erubescant."(Görgemanns-Karpp, 354, 1-2.)
- 66 松丸太「オリゲネスにおける神の痛みのオイコノミア」『日本の神学』33 (71-91頁)、日本基督教学会 1994年、84頁、参照。
- 67 「善」(ἀγαθός) という語、あるいはその変化した形は、『祈りについて』のなかで三十回用いられており、殆どの章において用いられていないかあるいは一回、また四つの章において二回、用いられている。しかし、試みについて述べられている29章には十回用いられ、この語がここに集中していることは明白である。
- 68 オリゲネスの神学においては、最も基本的な理解のひとつである。
- 69 オリゲネスにとって、存在と善とは同義語であるとネメシエギは述べている。神は「与える根源であり…すべての存在が生ずる」。P.ネメシエギ、前掲書、116頁、参照。